
ホームセンターのウサギ

たまねぎ侍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホームセンターのウサギ

【Nコード】

N7884Y

【作者名】

たまねぎ侍

【あらすじ】

ホームセンターに閉じ込められているウサギのお話。

”運命を受け入れるしかない”。

それは簡単に出来ることじゃない。

ねえ神様。早くここから出してよ。それで、もっと広い所で走り回りたいよ。

ボクは、ホームセンターで生まれたウサギ。気が付いたときから人間のペット用ゲージの中で暮らしてる。

一日二回、決まった量の餌を与えられて、水もあるし、不便じゃないよ。この暮らしは。でもね、ボクだって他の動物と同じように、外に出て思い切り走り回りたいんだ。それが出来るなら、ボクはどこに行っても不満じゃない。

ボクのゲージの隣には、ボクと同じ時に生まれただろうウサギがいた。その子は、ボクよりもおとなしい子だったし、毎日の決められた食事に何の不満も言わなかった。

ただ、今その場所にその子はいない。

* * * * *

ボクはある時思った。なんでこんな場所に閉じ込められているのに、あの子は嫌な顔一つしないで平然としていられるんだろう。気になって、聞いてみた。

「ねえキミ。」

ボクは初めて他人に対して話しかけるから、そう言い出すにも勇気が必要だった。

「……なに？」

その子は答えてくれた。てっきり無視されると思っていたから、ちょっと安心した。

「キミは、ここでの暮らしに不満を持ったりしないの？外に出て、思いっきり走り回りたいって思ったことないの？」

「うーん……。確かに思ったことはあるわ。でも、思ったところでどうにもならないの。毎晩このゲージをかじり続けても全く歯が立た

ないし、むしゃくしゃして人に噛み付いてしまったら、外に出られるチャンスは逆に少なくなってしまうし……。」

「人間に噛み付いただけで外に出られるチャンスが減る？そんなこと、あつてたまるか。」

「それが、あるの。わたしは、その理由を知ってるから、無理に暴れたりもしないの。」

そして、その子は苦い顔をしてボクに理由を教えてくれた。

今はもういないけれど、ちょっと前までここにはボクよりも大きいウサギがいた。そのウサギもボクと同じように、ここでの暮らしに不満があつて、ここの店員が来るたびに、その人間に噛み付いていた。

するとある日、そのウサギは姿を消したそうだ。ホームセンターの奥に。

ホームセンターの奥に消えたウサギは、人間の手によって殺された。外に出るチャンスを奪われた。なんでかって？それはそのウサギが“売れないウサギ”だったからだ。

人間は、ボク達ウサギを始め、いろいろな動物にお金を出して、買う。その金額は、動物によって様々

その時点でボクはイライラしてきた。命はどんなものにも平等に与えられるものだから、値段なんてつけられるはずはない。なのに、人間はボク達に値段をつける。命に価値をつける。それって差別じゃないか。しかも、動物によってその価値も変わるなんて、信じられない。

人間がボク達動物に価値をつけるには、いくつかの基準がある。主な基準は、大きさ、珍しさ、性格の三つ。

その子の話では、ボク達ミニウサギという種類につけられる価値は“ハッセンエンゼンゴ”らしい。それが、どれだけの価値を持つものなのかは、ボクは理解したくもない。

でも、その“ハッセンエンゼンゴ”という価値は、三つの条件を

全て満たしている場合につけられる価値であって、何かが欠けているとその価値は下がっていく。

イヌなんかは、小さいほど値段が高く、大きくなっていくにつれて下がっていく。それは、『小さいイヌは“かわいい”が、大きいイヌは“かわいくない”から』らしい。これは、大きさの基準。

珍しさは言うまでも無い。ただ、全世界にその種類の個体数がどれだけいるのかというだけ。少ないほど、価値は高い。

そして、性格。これが、ホームセンターの奥に連れ込まれてしまった原因だった。

こんな狭いゲージの中で日々生活していったら、誰だって気分が悪い。走り回りたいと思っても、思うように走れない。床は固いから、寝心地が悪い。天敵も襲ってこないから、野生の勘が鈍る。日々溜まり続けていくストレスの量は、尋常じゃない。ストレスが溜まりすぎて病気になる。

人間は、ボク達動物を買いに、日々ホームセンターにやってくる。どんな子を連れて帰ろうかと、輝いた目でもって、ボク達を見てくる。たまに、ボクを撫でるためにゲージの中に指を入れてくる。ボクはいつも黙って撫でられている。あのウサギは、ボクよりももっと気性が荒くて、ある時人間が差し出してきた指を噛んだ。少しは気が晴れたらしいけど、次の日から、人間はそのウサギに見向きもしなくなってしまった。その理由は、“人を噛むから”。

それでもたまにはそのウサギの所に人間はやってきて、指を入れてきた。噛む。また指を入れてくる。噛む。

そうしているうちに、そのウサギの価値はどんどん下がっていった。最終的に、ホームセンターの奥へと連れ去られてしまった。そのときの価値は“センキュウヒヤクハチジュウエン”だったらしい。

「じゃあキミは、早く人間の所に行って、すこしでも広い空間で走り回りたいから、おとなしくしているってこと？」

「そういうことになるわ。人間を噛んで、あのウサギと同じような

目には会いたくないでしょう?」

「それは確かにその通りだけど、キミはそれでいいのかい?」

「さっきも言ったじゃない。“仕方ない”のよ。こういう、ホームセンターのウサギとして生まれてきてしまった以上、大自然の中で生活しているウサギと同じ生活は出来ない。ホームセンターのウサギとして生きていくしかないし、人間に買ってもらうっていう、その役割をまっとうしなくてはいけないの。これは、運命なのよ。」

*

* * * * *

ボクはその日以降、こうして生まれてきてしまった運命を受け入れて、暮らしている。こんなことを“仕方ないこと”として受け入れるのは簡単じゃなかった。悩んで、悩んで、悩みぬいた結果、すこしでも早く広い場所で走り回るためには、まずこうして、早く人間に買ってもらえるように努力することだと分かった。

あの子は、話を聞いた一週間後にホームセンターを訪れた家族に引き取られていった。ボクが見た限り、あの人間はいい人間だ。目を見れば分かる。引き取られる直前、あの子は泣いていたかもしれない。ずっと待ち続けて、やっと解放されたんだ。嬉しいに決まっている。おめでとう。と心の中では叫んでいたけど、実際に口には出さなかった。空になってしまった隣のケージが、嫌に寂しかったから。

昨日まで、ボクのことを見てくれる人間はほとんどいなかったのに、今日になったら急に増えた。なんとなく理由は分かった。昨日までケージの前に貼ってあったプレートが消えているからだ。人間の文字は読めないけれど、おおよそこういうことが書いてあったんだろう。

“噛み癖あり”。

ボクは頑張ってるよ、キミ。いつか、キミみたいにすばらしい人間に買ってもらえるようにね。たまには人間に噛み付きたくなくなるときもあるけど、もう一度あのプレートが貼り付けられたら、ボクはもうここにいられなくなってしまうから、我慢する。

だから。

ねえ神様。早くここから出してよ。それで、もっと広い所で走り回りたいよ。

（後書き）

この前、ホームセンターに行ったら、ミニウサギが1980円で売られていました。

普通だったら8000円位するのに・・・と思って、ケージを見たら、『難有り』の文字。

なんか、こんなことで命に価値をつけるっておかしいことだと思って、三時間で書きました。

散文になってしまって、すいませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7884y/>

ホームセンターのウサギ

2011年11月23日15時52分発行